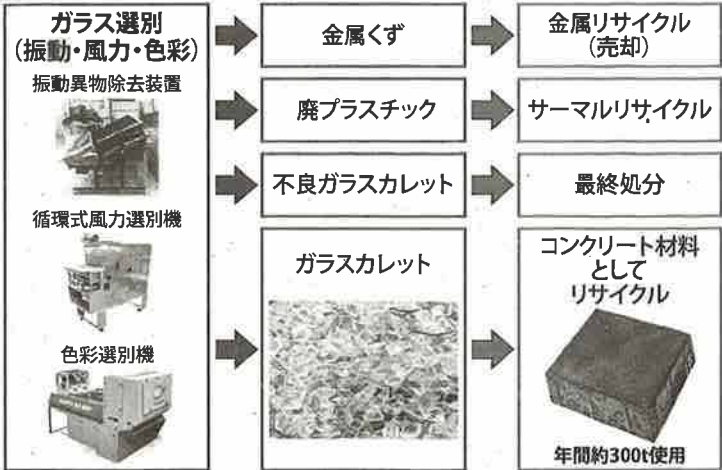


処理フローのイメージ図



よねざわ工業

太陽光パネル中間処理へ

ガラスからコンクリ2次製品

よねざわ工業(本社・恵庭)は、2026年4月から使用済み太陽光パネルの中間処理事業に参入する。パネルを自社で破碎・選別し、取り出したガラスをインターロックングブロックの骨材として再利用する取り組み。リサイクル率95%以上を目標に掲げていて、循環型社会の実現と事業の新たな柱を確立させたい考えだ。

リサイクル95%以上を目指す

1952年に創業。コンクリート2次製品の製造・販売を主力とする。新設住宅着工戸数の減少などを背景に市場の縮小が続き、新たな収益源の確保が課題だった。米澤悟社長は「既存事業を続けるだけでは中長期的な事業存続が難しく、新事業を立ち上げる必要があった」と説明する。

同社は脱炭素社会への貢献を目指し、4月に中小企業版SBT認定を取得するなどESG経営を推進。社会課題の解決と事業成長を両立させる道を模索していた中で、リサイクル業者からの相談をきっかけに新事業の構想が始まった。

固定価格買取制度(FIT)の開始以降、国内で急速に普及した太陽光

パネルは、30年代に多くが耐用年数を迎えて「大量廃棄時代」に突入すると予測されている。シリコン系太陽光パネルの62・5%を占めるガラスのリサイクルが課題となる中、「処理したガラスを活用できないか」という声が同社に寄せられた。

過去に瓶ガラスをコンクリート2次製品の原料とした経験があったため、新たなビジネスチャンスと捉えた。「パネルを受け入れて自社で処理した方が、原料を安定確保できる(米澤社長)」と考え、中間処理事業への参入を決めた。

事業は本社敷地内で進める。26年3月末までにパネルからアルミフレームなどを分離するセパレーター、ガラスを砕くハンマー、不純物を取り除く異物除去装置や選別機などの専用設備を導入。4月からの本格稼働を予定している。

受け入れたパネルは破碎・選別を経て、ガラス、金属、バックシートなどに分別。取り出したガラスをガラスカレットに加工し、インターロックングブロックの一部骨材に利用。年間約300tを利用する計画で、約3万平方分分に相当する計算だ。金属は有価物として売却し、バックシートなどは製錬リサイクル業者に委託することで、リサイクル率95%以上の達成を目指す。

設備導入には、北海道の「循環資源利用促進設備整備費補助金」を活用。産業廃棄物処分の許可を申請予定で、設備の導入に合わせて取得したい考えだ。

米澤社長は「この事業は当社の新たな成長の柱になる」と期待を込める。「社会課題の解決は企業の責務。最終的には100%リサイクルを目指したい」と話し、事業を通じて循環型社会の実現に貢献する姿勢を示している。